



## The Online World of Surrogacy in the U.S.

### オンライン世界における 代理母のナラティブ

#### Interviewee

#### Dr. Zsuzsa Berend

#### Q. 研究者としてのバックグラウンドを教えてください。

米国 UCLA で教えている。以前は、家族社会学に関心があった。いまは、経済社会学に一番の関心がある。Honors Program のディレクターをやっていて、ここでは、さまざまな学生が1年間の研究プロジェクトに取り組んでいる。

もともとは、歴史社会学の分野から自分のキャリアを出発した。その後、ロサンゼルスに移動したときに、代理出産に興味を持った。そのテーマについて本を出版し、イスラエルと米国についての比較研究も行った。

現在、研究テーマとしては、代理出産以外のものに移っている。パンデミックが、何か新しいことへの興味をかき立てているように思う。

#### Q. ご著書について、教えてください。

オンラインの代理出産についての研究をやって、そのあと本を出版したが、その期間は、10年以上(2002-2013)に及んだ。

その当時、代理出産のサポートグループは小さく、米国全土に点在していた。初めて SurroMomsOnline.com サイトを見つけたとき、このグループも小さかった。しかし、だんだんと大きくなり、も

っと伸びる潜在性があるとわかった。そして、徐々にわかってきたのは、このサイトは、代理母のサポートになっているということだった。どんな時間であっても、このサイトに質問を投稿すれば、誰かがすぐに答えてくれる。ユーザーは、素早いレスポンスを求めている、1時間以上も返事がなければ遅いと感じるくらいだった。

これは、エスノグラフィー研究を行う格好の対象だと思った。もちろん、これは、身体を使って行うエスノグラフィーではない。しかし、オンラインフォーラムのエスノグラフィーは、新しく、エキサイティングだった。最初、自分の研究経験があれば、サイト上のテキスト分析は十分にできると思っていた。しかし、間もなくわかったのは、オンライン環境では、人々の関わり方はかなり違っていた。女性たちのコミュニケーションは、まるでスピーチのようだった。誰かが書き込んだテキストに何か誤解が生じたら、他のユーザーたちが説明を加えて誤解を解く、という風。

研究を始めた当初は、ナイーブで無知だったと思う。それがどのくらい成長して変化しているか、気がついていなかった。しかし、オンライン上の会話は、圧倒的なボリュームになっていった。それで、それらを記録しカテゴライズすることを考えるようになった。それは自分の能力を超えるとも感じた。サイトに没入し、最後は、自分が関わっている範囲で、わかったことだけを書くことにした。それで、引き返して、自分がもっているデータを検討し始めた。

投稿を読んでいてわかったのは、女性たちは、その投稿の中で特定の問題について相談しているが、そのこと以上に重要なのは、そのストーリーをどのように提示するかということだった。そのことは、コミュニティのあり方、代理出産を



どのように定義するか、よい代理母とはどのような女性のことを言うのか、などについて、彼女たちの理解を知るために、非常に示唆に富んでいて役立つものだった。一つの投稿に続いているスレッドは、それ全体が分析の対象だと気がついた。最初の投稿よりも、それに続く投稿の方が、もっと重要だった。このスレッドを分析することによって、代理出産や代理母の役割についての女性たちの集合的理解に光を当てることができた。

このオンラインコミュニティで何が起きているのかを真に理解するまで時間がかかった。この経験は、人類学者のそれに擬えられる。最初の2-3年は、慣れるまでの助走期間。同時に他の仕事もこなしながらだった。その後、もっと定期的にサイトを訪問するようになり、さらに集中的に研究するようになった。そして、代理母と直接にやりとりをするようになった。その頃には、定期的にサイトを訪問して、その間に生じた変化もきちんと追跡するようになった。

#### Q. 調査の後、米国のオンラインでの代理出産を巡る状況はどのように変化しましたか?

かなり変化している。研究を終了したあとも、SurroMomsOnline.comのサイトを再訪するのは楽しかったが、その後、サイト上での相互作用は活発ではなくなっていった。フォーラム上の議論は、頻度が少なくなり、最後は途切れた。参加者は、Facebookのグループへと乗り換えたから。だから、SurroMomsOnline.comは、情報を提供するだけのサイトに変化していった。

#### Q. オンラインコミュニティ以外に代理出産に関する調査を行いましたか?

していない。代理出産について研究している同僚がいるので、現在どうなっているか多少の情報は持っている。しかし自分で調査したわけではないので、詳しくはない。そして、Facebookグループのメンバーにもなっていない。この研究テーマからは離れていて、現在の代理出産についてはカバーできていない。

#### Q. 調査で、難しかった点がありましたか? 調査の一般化可能性についてはどのように言えますか?

書籍で書いた内容や分析は、正しかったと思っている。もちろん解釈は自分で行なったものであり、その意味で主観的なものだが、データに基づいている。ギフトという捉え方は、学際的な見地によるものだ。

学際的な考察を行なったことは、大きなチャレンジだった。もっと狭いスコープで分析すれば、読者には理解しやすく簡単だったに違いない。学際的な仕事は、批判を浴びやすい。これまで受けたレビューでは、どれも視野が狭いもので、レビュアーの専門領域に引きつけていくつかの領域について考え、別の領域を見過ごしていた。それは、とても不満だった。

生殖やジェンダーに特別関心があるわけではなく、むしろ経済社会学により関心がある。経済社会学では、人々は、個人的な関係をどのように金銭的な契約関係へと結びつけているか(代理出産、家事、ベビーシットングが格好の例となる)などを考える。人々は、このような、非常にセンシティブな境界をどのように超えるのか? それは、ギフトなのか売買なのか? 代理出産は、この複雑な問いを考えるための格好の例だった。人生はクリアカットではない。だからこのような境界



を決定することはとても興味深いことだった。

もしかしたらこの研究の課題設定が正しくなかったのかもしれないと思っている。それが、自分の研究に対する誤解を生んだのかもしれない。レビュアーらの特定のコンセプトに対する解釈はさまざまに異なっていた、それは彼らが異なるバックグラウンド出身だったからだと思っている。

**Q. 米国の代理出産は高度にビジネス化されていると思います。その反面、利他性や親密性や、ギフトということが同じくらい強調されています。このような代理出産の解釈が生まれるのには、どのような背景がありますか。米国とイスラエルが似ているのはなぜでしょうか？**

米国とイスラエルの間には文化的社会的類似性がある。その一方で、違う点もたくさんある。これらを社会的文化的政治的コンテキストに照らして解釈することができる。米国は、高度に個人化されている。人々は、一つの家族しか作れない(同時に複数の家族を作るとは許容されない)、それが公序良俗だから、という考え方でなり立っている。ところがイスラエルでは、依頼親と代理母の関係はもっと濃密。それは彼らが同じ文化的共通性を有しているから。面白いのは、米国の代理出産には、ネーションという枠組みはあてはまらないこと。代理出産に際して、“私はよりよいアメリを建設中だ”とは誰もいわない。だから国家という要素は全くない。

米国では、代理母たちは貧困ではないということは重要。教育もある程度ある。だいたい高等教育を終えている。代理母を探している米国の依頼者の多くは、安すぎる代理母は求めていないように思う。彼らは代理母をあてにしなければ

ならない、だから、きちんと食べていて、きちんと病院のアポイントにいき、自分をケアできる人を求めている。もし代理母にお金がなかったら、医学的にきちんと自分をケアすること、そのために必要な基礎知識を共有することすらできないだろう。だから米国のほとんどの代理母は結婚している 20代から 30代の後半の女性で、まだ幼い自分の子どもがいる女性になる。そして代理母の多くが仕事をもっている(イスラエルの場合はもっとそれがあてはまる)。代理母たちは、困窮している女性ではないことは確か。代理母が経済的に困窮している、というのは、間違っている。

利他性については、代理母たちは、それをお金のためだけにやっているわけではないと理解している。その理由の一つは、妊娠はその都度違って、妊娠する前にそのリスクを知ることはできないということ。ということは、契約するとき、自分に本当に何が起こるかはっきりわかっていないということになる。その意味で、それは仕事ではない。真の犠牲的行為となる。お金のために代理母になるのは事実だが、お金のためだけではない。だから全ての代理出産には利他的な側面がある。

興味深いのは、妊娠の失敗によって、代理母をやめる決心をする女性もいること。それは非常に含意に富む。例えば、米国の中産階級のゴールは、決して諦めないで、ゴールを追求し耐え抜くことだ。この価値観からすると、代理母たちは、何度失敗してもそれに屈せずチャレンジし続けるはずだ。この考えは代理母にとって魅力的で、自分は依頼者に赤ちゃんを与え、不妊の痛みから救ってあげられる唯一の存在だという考えに結びつく。それは、支払われてやること以上の価値を追求しようという考えにつながる。フェミニスト批判のなかには、代理



出産のこの要素をきちんと考慮していないものもある。

**Q. 依頼者と代理母の関係は、美化されていると思います。これについて実際のところはどうでしょうか？ 深刻な葛藤や、修復し難い決裂は生じますか？**

葛藤の例はたくさんある。シンプルで肯定的なストーリーは、オンラインでは注目されない。代理母たちは自慢したがらないし、もしそういう肯定的な投稿があったら、誰もリアクションしないので、消えていく。それとは逆にネガティブなストーリーがオンラインで投稿されたら、それは注目されることになる。ネガティブな経験の一つの例は、サービスの対価を支払い終えた依頼者が、その後は代理母との関係を終わらせたいというものがある。

このような決裂は、どのような関係の終結にも、同じように見られる。自分が思い描いていたようなものとは違うと認識したら、人々は関係性の調整の仕方を間違えたと思うだろう。

期待も大きな役割を演じている。Surro MomsOnline.com では、代理母たちは、他の代理母たちが依頼親との関係でどのようなことを経験しているかを知ることができる。このような外部の情報があるお陰で、自分たちの期待を調整することができ、経験の満足度が高まる。例えば、もし代理母が出産後、依頼親から時々カードをもらえるだけの関係であることに不満を抱いたとき、サイトの投稿を読めば、訴訟に発展したケースなどもあることがわかる。そうすれば自分の視野がまとまり、自分の状況はまだいいほうだと気づける。

オンラインのコミュニティでは、長い間に、グループの集団心理がどのように変わっていくかを観察することができ

た。それは、依頼親からの返礼を期待することはできない、というメンタリティが変わっていった。その意味は、代理母は依頼親に生命を贈った、しかしそれは依頼親のためではなく、むしろ代理母自身が報われたという感覚を生み出しているのだ、という意味。代理出産それ自体が、報われたという感覚を生み出しているという見方をするようになっていく。このような変化それ自体もまた、ある種の満足感につながる。

それから、不妊の痛みというものが、代理母のコミュニティに美しい演出をもたらしていることもわかった。不妊の痛みが破壊的で逃れることができないものだという考えは文化的な逸脱であり、代理母たちはこの考えをさらに膨らませる。もし、依頼親が、望んだように扱ってもらえないとき、グループの中で、失敗続きであることにとっても打ちひしがれていて、心を守るのに必死だと、告げるだろう。この解釈は、依頼親は(代理母が期待するほどには)代理母に感謝していないという考えを支持するものだ。

**Q. 子供が生まれた後、代理母に対して冷たくなり、疎遠になる依頼者もいるのではないかと思います。そのような場合に、代理母は法的に何もできないのでしょうか？**

代理出産の際には契約書が作成されていて、多くの州でそれは法的拘束力がある。

出産後のことについて言及する項目を設けている契約書も時々ある。しかし、自分の解釈では、代理母たちは、そのような細かな取り決めを次第に望まなくなっていく。代理母たちは、その選択は、懸命なものだと考えている。代理母たちが欲しいのは、本心からの感謝と敬



意、ケアだから。契約書でそれを強制するのは現実的ではない。

自分が見てきた中では、代理母が出産後のコンタクトを求めたり、金銭を求めたりして裁判を起こした例はない。その理由は、一つは、それをやること自体にお金がかかること、もう一つは、そのことを暴きたくはないし、その問題をめぐって何年も争いたくはないから。このような状況にある代理母は、自分で責任をとることを選ぶ。自分が学んだことを他の人に話したり、次の代理出産では同じ過ちを繰り返さないようにしたりするといったように。

裁判所に行くことは、代理母たちが求めている心の平和には繋がらない。彼女たちがいつも言っているのは、“良い人になりたい”ということだから。

**Q. アジアの国々で行なった調査では、“家族のため”ということが代理母たちの語りの主要な位置を占めていました。このような語りの違いはどのような要因で生じるのでしょうか？**

インドやカンボジアと米国では、生活のリアリティが全然違うと思う。米国の代理母たちにとって、受け取れるお金は、最初に期待したほどではない、ということが最終的にはわかる。出産後の療養で仕事を失ったり、車の駐車代金やガソリン代などの細かい費用を依頼者に請求するのを躊躇ったり。代理母たちは、過度にビジネス的になることを避けたいと思っている。それに対して、発展途上の女性たちは、代理出産によって得られる小さな金額ですら自分で稼げるような機会を与えられていない。

パワーの違いもある。米国やイスラエルでは、代理母たちは自分のパートナーと良い関係を築いていることが多い。パートナーは代理出産のプロセスの間、サ

ポートしてくれる。そのような事例は、途上国ではないのではないかと。途上国では、カップルは代理出産による収入がもたらすパワーによって、家を買って引っ越しをし、義父母と一緒に住まなくて済む。

女性の意思決定に影響を与える社会文化的政治的な違いはたくさんある。

**Q. 例えば、Find Surrogate Mother というサイトがあり、世界中の人々が登録しています。今後、親密性や利他性、ギフトなどを特徴とした代理出産のナラティブは、世界中に広まっていくと考えられますか？**

そのサイトについては知らなかった。最初、代理母たちはエージェントに連絡し、コツを覚える。そして、その後、エージェントを通さずに自分でプロセスに入る。最初、ほとんどの代理母は組織によるサポートを好む。しかし、今日では、組織を通さずに自分たちで契約書を作って進める方法はたくさんある。景色は変化している。この状況は、米国に特有なものだ。

ヨーロッパでは、代理出産は禁止されていたり、厳しい法律のもとで運用されたりしている。この問題について、強硬な意見もある。しかし、パンデミックが国際的な代理出産に与える長期的な影響はまだわからない。

**Q. 昨今、パンデミックなど、CBRCをめぐる状況は大きく変化してきました。今後、米国の代理出産は、どのように変化していくのでしょうか？**

米国の代理出産は、それほど変化を被らないだろう。米国では、医療セクターは私企業であり、儲かる分野。次々と色々なエージェントができては、消えて



行く。代理出産の医療的な面は、自己規制で行われていて、すでに確立されている。そのことは変化し難いだろう。代理出産のプロセスにおいて、彼らは非常に影響力がある。

契約による規制は、一つの側面にすぎない。実際には、エージェントやクリニックには、数えきれないほどの問題がある。つまりこういうことだ。自分の見立てによれば、米国の代理出産は、規制には強く抵抗する。それが産業になることを望んでいない。そうではなく、私的なものになることを望んでいる。そのような規制は、プロセスを容易にする可能性はあるものの、人間味がなくなる。一方で、イスラエルの代理母たちは、規制を好んでいる。

研究からわかったことは、人々は既製品をあてがわれるのが嫌いだということ。個人間の交渉に委ねられた方がいいということ。個人の関係や責任に重きをおくのは、米国流であり、ネオリベラル的とも言えるかもしれない。例えば、代理母たちは、クリニックや代理出産は、もっと規制されることが望ましいとよく言っている。しかし、契約書がもっと規制されるということは望んでいない(それは規制するのが一番簡単なものだが)。興味深い対比だと思う。彼らの中では、契約は関係性の一部だと考えられているようだ。

最近、海外、特に中国からやってくる依頼者は、代理母と全く関係を持ちたがらない。そういった依頼親との契約では、代理母たちは、おそらくより多くの対価と引き換えに、依頼親たちと親密な関係性を持つことを諦めざるをえないのではないか。それは、潜在的に新しい問題を生み出す。つまり、代理母たちは利他的な要素に依拠することができないということになるから。そうなると例えば、女性たちはボーイフレンドからのプ

レッシャーでお金のために代理母になるというようなことが生じるかもしれない。

代理出産に対する新しい展開やアプローチが出てきている。そして、新しい属性の人たちが参加するようになってきた。つまり新しい慣行が生じてきているということで、それは、SurrMomOnline.comの研究では観察できなかった。特に、一部のクリニックにとって、外国人の代理出産依頼者の存在は非常に魅力的。米国では、規制されていないエージェントや自己規制型のクリニックはなんでもできる。アメリカの規制が将来変わるかどうか、自分には予測できないが、そのような現状がある。

(2021年9月)

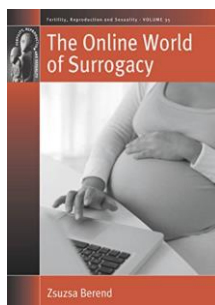
@YURI HIBINO



Dr. Zsuzsa Berend [Link](#)

米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校で社会学を教えている。10年以上にわたり、米国のオンラインの代理出産コミュニティで学際的な手法を用いて民族誌研究を行った。

“



“The Online World of Surrogacy”(2016)

米国最大の代理出産のコミュニティサイトである [SurroMomsOnline.com](#) で長期にわたる参与観察を行い、民族誌としてまとめた。利他性や親密性、金銭をめぐる代理母のナラティブを内在的に明らかにし、革新的な方法論を提示した。

論文:

Teman E, Berend Z. Surrogate non-motherhood: Israeli and US surrogates speak about kinship and parenthood. *Anthropol Med*. 2018 Dec;25(3):296-310.